

すべての人間は尊い存在です。
人生は、必ずやり直すことができるのです。



藤敷庸一さん

聞き手 編集部

白浜バプテスト基督教会 牧師
NPO法人 白浜レスキューネットワーク 理事長

和歌山県白浜町にある三段壁は、世界中の旅行者が訪れる断崖絶壁の名勝。しかし一方で、数十年前からここから飛び降りて命を絶とうという人が後を絶たず、「自殺の名所」にもなっている。牧師である藤敷さんは、10年以上この白浜で、自殺志願者の救助、保護活動をしており、これまでに約5000人を救助している。藤敷さんは、国の即効性を求める自殺対策には、不十分な点があると指摘する。

いのちの電話

—三段壁に設置してある「いのちの電話」の白い立て看板は、ドキリとするというか、ひときわ目を引きますね。

藤敷 看板は、これまで4つありましたが、今年になって崖の脇の方に2つ追加しました。以前は絶壁の中央から飛び込む人が多かったのですが、中央に柵を作ったことで、今度は崖の両サイドからの自殺が始めたためです。三段壁では、年間10〜20件の飛び込

みがあり、保護件数は約150件にのぼります。

私たちの活動は、この看板を見てかけてくれた自殺志願者の、1本の電話から始まります。「いのちの電話」はまず教会につながり、不在時には私の携帯電話に転送されます。自殺志願者が電話をかけてくるのは、夜から早朝に集中しているため、24時間体制で対応しています。いまは古畑^{あまほ}普さんというスタッフが入ってくれて、日中は彼女が電話を受ける担当です。1本の電話が人の生死にかかわることもあるので、どこへ行っても電話は手放せま

PROFILE ●ふじやぶ・よういち●

1972年、和歌山県白浜町生まれ。東京基督教大学神学部神学科卒業。1999年、先代の江見太郎牧師の跡を継ぎ、郷里の白浜バプテスト基督教会の牧師になる。「いのちの電話」の相談とともに、三段壁を訪れる自殺志願者の保護と、共同生活を通じて自立支援活動をしている。著書に『「自殺志願者」でも立ち直れる』（講談社）がある。

せん。

三段壁から電話がかかってきたら、自殺志願者の居場所を聞いて、すぐに会いに行きます。教会から三段壁までは、軽トラックを飛ばして10分ほどです。相手の気持ちがかわらないうちに、とにかく急いで出向き、車の中で話をします。約束の場所になかった場合は探し出し、見つけたら、崖から離れた場所で、相手に刺激を与えないように気をつけながら、その場で話しをし

ます。

—自殺志願者は説得に耳を傾けてくれますか。

藤敷 自殺を考えている人は興奮状態にあるため、気持ちが悪く落ち着くまで静かに付き添います。そして、話ができるような状態になったら、「あなたを助きたい」という意思を伝え、とことんその人の話を聞き、気持ちが生きている方に向かうよう、一緒に手立てを考えます。

年配の方などは、私が思ったよりも若かったというところで、がっかりしたり、何を言っても聞く耳をもたない人もいます。しかし、少なくとも「いのちの電話」の看板を見て、最後の勇気を振り絞って電話をかけてきた人です。多くの自殺志願者は、本当は「生きたい」と思っています。多くの問題を抱えて、死を選ばざるを得なくなっ

するのですね。

藤敷 そうです。私には妻と二人の子どもがおり、教会の隣にある2階建て3LDKの家が私たちの住居です。始めた当初は、8畳の部屋は私たち家族が使い、4畳半の部屋には女性、6畳の部屋には男性と、それぞれ1つの部屋を使ってもらいます。5、6人が常に滞在しており、多いときには教会にある3畳の部屋を使うこともありま

す。今は分けていますがトイレもお風呂も共同で使っていました。

—素性がよく分からない人と暮らすのは、抵抗を感じませんか。

藤敷 正直に言いますと、家族みんなぎりぎりのところでやってきました。日々の生活は、決してきれいごとではありません。共同生活者の中にはトイレをきれいに使うことができない人も



南紀白浜の名勝・三段壁。青く広がる海と大岩壁の迫力には圧倒される。長さ2キロ、高さ50メートル以上、断崖の先端に行くにはかなりの勇気がある

てしまった人がほとんどなのです。生きるための一縷の望みを消さないためにも、何時間でも粘り強く話をします。

相手の状態をみて大丈夫だと判断したときは、帰る場所のある人の場合、家族に迎えにきてもらったり、白浜駅から電車に乗せて見送ります。しかし、帰るところのない人の場合は、私たちがほかの保護した人たちと一緒に生活しながら、白浜で仕事を見つけて、

いますし、一緒に食事をするのがいたたまれないほど汚い食べ方をする人が飯が少ないと文句を言う人、何度言っても隣近所への挨拶など最低限のマナーが守れない人、なかにはリストカットする人もいます。家族や他の共同生活者の安全を守るためにも、強制的に退所してもらった人もいました。また、せっかく仕事を探して働き始めても、最初の給料をもらった次の日に雲隠れしてしまう人も、一人や二人で

古の電話機は手放さないとスタッフの煙普さんはいかなる時も手放さない



自立を目指すことを促します。

共同生活から自立を目指す

—藤敷さんご一家と一緒に共同生活を

はありませぬ。共同生活者同士のケンカもありますし、人間関係に悩んで出て行く人もいます。私も腹の立つことは本気で怒りますし、相手もすごい勢いで向かってきます。

実は、自殺志願者の救助活動は私で2代目です。20年前、先代の江見太郎牧師と一緒に「いのちの電話」の活動をしていた時代には、長期滞在者はそれほど多くはありませんでした。しかし不思議なことに、なぜか私が継いだ翌日から、次々と長期滞在が必要な人が現れるようになったのです。妻もこの数年でかなり強くなりましたが、随分苦労をかけていると思います。家族全員、自分の時間を確保するための切り替えもうまくなりました。子どもたちが少し大きくなったので、家族との時間も大切にしたいと思い、以前は共同生活者と一緒に食事をとっていましたが、火、木曜日以外の夜ごはんは、家族だけで食事をとるようにしていま



▲三段壁の入り口にある電話ボックスと立て看板



▲断崖近くの「いのちの電話」の立て看板

▼電話の横には10円玉が入った箱があり、常に切らさないようにしている



す。

偉人たちの生き方に 影響を受ける

—普通の人では根を上げてしまうと
思います。なぜ、この活動を続けてい
けるのでしょうか。

藤藪 子どものころ、アフリカ難民を
取り上げたドキュメンタリー番組で、
自分と同じ年ごろのたくさんの子ども
が飢餓で亡くなっているという事実を
知り、衝撃を受けました。今、食事が
できて、暖かい布団で眠れる、そうい
う状態がすぐありがたいことで、感
謝しなければならぬことなのだ、と
いう考え方がはじめて芽生えたのは、
そのころだと思えます。そして、父が
枕元で読んでくれた「ビルマの竖琴」
や、マザー・テレサ、アーサー王、ヘ
レン・ケラー、キング牧師、ジョージ・
ミユラーらの偉人たちの足跡に影響を

受け、とても憧れました。また、江見
牧師が教えるイエス・キリストの愛に
満ちた犠牲の精神にも感銘を受けまし
た。「自分もこういう人になりたい」「本
当に助けが必要な人のための力になり
たい」という気持ちで牧師になった
原点であり、今の活動の源泉だと思
います。

トルストイが聖書をもとに書いた
『靴屋のマルチン』という物語があり
ます。ある夜、年老いた靴職人のマル
チンが、「明日あなたのところに行き
ますよ」というイエス・キリストの言
葉を聞きます。マルチンは翌日キリス
トの来訪を心待ちにしますが、その日
に限って、貧しい赤ん坊を連れだ女性
や物売りの老女などが現れ、マルチン
はその人たちの対応に追われ、お茶や
食事をご馳走し、さまざまもてなし
をするのです。結局その日はキリスト
が来なかつたと、マルチンはがっかり
します。しかしその日の晩、彼は「私

は今日、あなたのところへ行きまし
たよ」というキリストの声を聞くので
す。聖書には、「最も小さき人者の一
人にしたのは私にしたのだ」という言
葉があります。つまり、貧しい女性や
老女などがキリストだったというわけ
です。

白浜町ではいろんな人と出会いま
す。先日路上生活をしている男性が
ひょっこり教会に現れて、「あつちの
お寺ではウン万円、こつちのお寺では
ウン万円もらったんだけど」と、明ら
かに胡散臭いことを言う人がやってき
ましたが、「うーん、もし、この人が
キリストだったら……」と思うと、やつ
ぱり邪険にはできません（笑）。お金
をあげることはできませんが、その人
には一緒に共同生活をしないかと誘
いました。

とにかく、目の前の人にどう誠実に
対応するか、ということが問われてい
ると思えます。これは信仰心によるも

のですが、神様の許しが得られるとき
まで、この仕事はやめるわけにはいか
ないです。早く神様が「もういいよ」つ
て言ってくれないかなと思っていま
す。「この働きはここまでで十分だ」
と。私はその日を楽しみにしているの
です。

自殺は罪

—キリスト教では自殺は罪ですが、そ
れを自殺志願者にお話しすることはあ
りますか。

藤藪 最初からキリスト教の話をして
も「私は仏教徒だ」などと言って、つっ
ぱねる人がほとんどですので、特に質
問を受けた場合にだけお話しします。
自殺はなぜ罪か——人間は生まれる
と思つて生まれてきたわけではありま
せん。命はもともと与えられたもの
です。その命を自分で捨てるということ

は、それを自分の権利だと言っている
ようなものです。神様は目に見えなく
ても生きるためにいろんな援助をして
くださっています。神様が望んでいる
限り、命は尽きないものだとして理
解しています。それを途中で捨てるとい
うことは、神様を否定することになり、
ながしるにすることになります。だ
からキリスト教では自殺を罪だと言

っているのです。
また「たとえすべての人があなたを
見放しても、あなたは尊い存在だ」と
も教えています。クリスチャンであ
ろうとなかろうと、自分という存在には
必ず意味があつて、とてつもなく貴重
で、愛されているのだ、ということ
を、私は自殺志願者にずっと伝えてい
きたと思つています。



三段壁は上から下まで約50メートルほどあり、一旦飛び込んだら即死だと言われています。しかし実際は、落ちていく途中で枝にひっかかりたり、岩に当たることなく海に落ちて助かったり、かすり傷だらけだけど奇跡的に生きていた人も大勢います。神様が落ちていく間に、生きる方向へ介入してくださることも、きつとあるはずだと信じています。

自殺を選択せざるを得なかった背景

―国は自殺対策に力を入れていますが、これについてはどう思われますか。

藤藪 内閣府は自殺対策を国民運動にしようと、さまざまな働きかけをしながら啓発をしています。自殺は確かに社会問題ですが、焦点を当てる部分が少しズレている気がしてなりません。私はよく「なぜ、死にたいと思う人を



白浜バプテスト基督教会

助けようとするのか」と聞かれることがあります。自殺をするのはその人の「自業自得」じゃないかと。これは少数派の意見ではありません。こうした意見が、実は自殺対策の壁になっているのです。私はこのように考える人たちを否定しませんし、こうした意見に対して、一つの答えを持ちたいのです。

私たちが三段壁の自殺志願者に密接にかかわって思うことは、精神疾患などの場合は別として、自殺の原因は、その人の育てられた環境、その人が関

わってきた多くの大人たち、社会にあるのではないかと、ということですが。

特に私がかかわってきた人たちは、その人自身の力が及ばない不可抗力の部分が大いと感じます。満足な教育が受けられず、乏しい人間関係の中で育てられたことなどによって、もともと不利な状態におかれ、生きづらさを抱えている人がとても多いのです。彼らの生きてきた背景を想像すると、自殺という判断しかできなかっただろうな、と同情する例がいっぱいあります。自殺は確かに自業自得に見える面がある。それは事実であり、勇気を持って言っていかなければならないことです。自殺はいけないという教育、自殺志願者のもつさまざまな不利な条件に対する支援、そしてその人が立ち直っていくために必要な時間と人間関係が営める社会づくり、こうしたことに目を向けていかないといけないと思うのです。

子どもたちには「生きて」責任をまっとうすることを教える

―藤藪さんたちは、救助、保護以外に自殺対策をしているのですか。

藤藪 私たちはいま、子どもたちの自殺予防教育に取り組んでいます。日本には過去「切腹」という、自分の命をもって責任をとるという風習があり、これが連綿と人々の潜在意識の中にあるように思います。子どもたちには、過ちを犯したら「生きて」責任をまっとうすることが大切であることをきちんと教える必要があります。教会では、学習支援塾とはじめ人間自然塾を定期的に開催しています。これは、子育てをその家庭の問題だと責任を押し付けるのではなく、家庭、学校、地域で一丸となって取り組んでいこうというものです。学習支援塾は地域の子どもの

勉強を手伝うもの。はじめ人間自然塾は、キャンプや遊びを通して年齢や家族の枠を超えて模範となる大人と出会い、地域社会、親同士のつながりをもつことなどを目的としています。もし、将来その子どもが自分の命を絶とうと考えたとき、こうしたつながりがあれば、誰かに相談することができると思うのです。

白浜町では、確実に自殺対策の連携の輪が広がっています。官・民合同で三段壁の巡回パトロールをしていますし、役場では景観が損なわれるからと設けなかった柵を2009

年に設置してくれました。精神疾患の兆候があれば、保健所の職員が駆けつけてくれますし、タクシー会社も自殺志願者らしき人を乗せたら三段壁には

私たちは、「いざとなったらあそこがある」。そういう存在でありたいと考えています。



藤藪さんの著書
「自殺志願者」でも立ち直れる
(講談社)

★支援を受け付けています。

お金、お米、食材、家電製品、寝具、衣類、ハブラシやタオルなどの日用品をお送りください。何でも助かります。

【白浜レスキューネットワーク】

〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町3137-8
電話&FAX 0739-43-8981